



# 安積の歴史シリーズ



## 第29回 近代 国営の安積開墾と入殖者

柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会  
委員



### 開墾地

国営の安積開墾は、明治11年11月12日に久留米士族が大蔵壇原に入殖したのに始まり、同20年に鳥取士族内田辰蔵が広谷原に入殖したのを最後に、500戸が入殖した開墾で、国が主体となって行った。

入殖した場所は第1表のように<sup>(1)</sup>、安積郡の対面原・広谷原・四十壇原・牛庭原・大蔵壇原・山田原・大槻南原・塩ノ原・駒屋北原・湯ノ原、安達郡の青田原、岩瀬郡の西原・下原・岡谷地原・吉美根原・四十壇原・滑沢原、西白河郡の小田倉原・滑津原・八幡原・十軒原、石川郡の沢井原、耶麻郡の山潟原である。

そのうち代表的なものをみると、対面原は安子島・前田沢・堀之内・下伊豆島・高倉・日和田・早稲田の7カ村、広谷原は堀之内・下伊豆島・日和田・富田・片平・八山田・久保田・早稲田の8カ村の入会秣場で、吉美根原は西川・森宿・大桑原・越久の4カ村、小田倉原は小田倉・真船・熊倉・鶴生木の4カ村の入会秣場である<sup>(2)</sup>。秣場に入殖し開墾したのである。

秣場とは、本誌 No.478に記載したように、田畑の肥料や牛馬の飼料である草、燃料となる薪を刈り取るための場所である。

### 入殖状況

国営の安積開墾は、明治9年11月に大久保利通

第1表 秣場と入会村々

郡名	秣場名	入会村名
安積郡	対面原	安子島・前田沢
		堀之内・下伊豆島
		高倉・日和田
		早稲原
	広谷原	堀之内・下伊豆島
		日和田・富田
		片平・八山田
	四十壇原	久保田・早稲原
		駒屋・八幡
	牛庭原	鍋山
笹川・川田		
安達郡	大蔵壇原	成田・岩瀬郡仁井田
		荒井・小原田
	山田原	山口・多田野
		大槻南原
	塩ノ原	大槻
		山口
	駒屋北原	駒屋・川田
		大槻
	湯ノ原	多田野・山口
		大谷
岩瀬郡	青田原	荒井・青田
	西原	滝・梅田
	下原	西川・稲村
	岡谷地原	白子
	吉美根原	西川・森宿
		大桑原・越久
	四十壇原	稲村・岩瀬
滑沢原	松塚	
西白河郡	小田倉原	大久保・大桑原
		小田倉・真船
	滑津原	熊倉・鶴生木
		滑沢・河原田
		北平山村
八幡原	中畑・松倉	
	二子塚・関和久	
十軒原	大畑・中畑	
	強葉・中畑新田	
	中畑・泉崎	
耶麻郡	踏瀬・中畑新田	
	松倉	

内務卿の命を受けた高畑千畝・南一郎平が、開墾する場所を調査するため、陸羽地方を巡回し、その帰途に福島県を訪れたことに始まる<sup>(3)</sup>。西南戦争のため開墾政策は一時中断したが、大久保利通は、明治11年3月に、勸農局御用係奈良原繁を責任者として安積郡に派遣し本格的に開始した<sup>(4)</sup>。

年ごとに入殖者の人数を示したのが第2表である<sup>(5)</sup>。

最初に入殖したのは久留米士族で、久留米開墾社を結成して、明治11年11月12日に西田七蔵等6戸、同月20日に森尾茂助・測上浅吉が入殖し、同17年までに大蔵壇原に77戸、対面原に64戸が入殖した。

高知士族（土佐藩）は、明治14年から入殖を始め、高知開墾社を結成して、明治18年までに広谷

原に71戸、高知開墾協力組を結成して明治17年までに山田原に35戸が入殖した。

鳥取士族は、鳥取開墾社を結成して、明治13年4月9日に田中稲八・今井善次郎・広江一清等が、10月には今井鉄太郎・村上巖・坪内元暁・尾坂庄八、仙石吉衛等が入殖し、明治20年までに69戸が入殖した。

松山（愛媛）士族は、明治15年4月10日に山本正等13戸、同16年・17年に2戸ずつ牛庭原に入殖した。

岡山士族は、明治13年に小松（日置）健太郎、同14年に丹波常太郎・林鷹太、同15年に中根冷の4戸が対面原に入殖した。

管内からとして、元米沢藩士族・元二本松藩士族・若松士族・元棚倉藩士族が入殖した。

第2表 年次別入殖戸数

藩名	開墾社名	郡名	原野名	明治											合計
				11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年		
久留米士族	久留米開墾社	安積郡	大蔵壇原	8	34	8	23	0	1	3					77
			対面原	1	49	6	4		4					64	
高知士族	高知開墾協力組		広谷原				23	15	28	4	1				71
			山田原				24	5	2	4				35	
鳥取士族	鳥取開墾社				8	32	15	5	8				1	69	
松山士族	愛媛開墾人		牛庭原					13	2	2				17	
岡山士族	岡山開墾人		対面原		1	2	1							4	
元鹿兒島藩	鹿兒島開墾人		吉美根原		1									1	
元静岡藩	静岡開墾人		牛庭原			1								1	
元米沢藩	米沢開墾人		桑野村		1									1	
元天童藩	山形開墾人	四十壇原						10					10		
元棚倉藩	棚倉開墾社	西白河郡	滑津原					1						1	
		安積郡	対面原			2	25							27	
	棚倉開墾人	岩瀬郡	西原					1						1	
			下原						1					1	
			岡谷地原								(1)			1	
		西白河郡	滑津原					6	(1)	(1)	(1)				9
			小田倉原						(5)	(6)	(3)				14
			石川郡	沢井原					2						2
	元二本松藩	二本松開墾協力組	安積郡	対面原			11								11
			安達郡	青田原					10						10
二本松開墾人		岩瀬郡	吉美根原				6	4(3)	1(3)	(3)	(1)			21	
			四十壇原				1							1	
		西白河郡	十軒原				1							1	
			小田倉原						(1)					1	
若松士族	若松開墾人	安積郡	大槻南原			13								13	
			塩ノ原			6	4	2(2)						14	
			対面原			1								1	
			駒屋北原					3						3	
		岩瀬郡	湯ノ原						1						1
			滑沢原								(1)				1
			耶麻郡	山湯原				1							1
			岩瀬郡	吉美根原							(1)				1
元湯長屋藩	湯長谷開墾人	岩瀬郡	下原					1	(1)				2		
元川越藩	川越開墾人	西白河郡	小田倉原						(3)	(1)				4	
元刈谷藩	刈谷開墾人		小田倉原						(1)					1	
元高田藩	高田開墾人		八幡原							(1)	(2)				3
			十軒原								(1)				1
			滑津原								(1)				1
			岩瀬郡	吉美根原							(1)				1
元静岡藩	静岡開墾人		西白河郡	小田倉原						(1)				1	
合計				9	84	37	154	75	84	47	9	1	1	500	

元米沢藩士族である石井貞廉は明治12年に桑野村に、有江之徳等は東北開墾社を結成して、明治16年に10戸が安積郡四十壇原に入殖した。東北開墾社の社長は立岩一郎、明治17年4月21日から有江之徳が勤めた。

元棚倉藩士族は、阿久津直重等27戸は棚倉開墾社を結成して、明治13年・14年に対面原に。米倉光義等6戸は明治16年に西白河郡滑津原に入殖した。

元二本松藩士族は、阿部正安・渡辺潤等11戸が二本松開墾協力組を結成して明治13年に対面原に、安保七郎等10戸は二本松開墾社を結成して明治16年に安達郡青田原に、佃政幸等10戸は明治15年・16年・17年に岩瀬郡吉美根原に入殖した。

若松士族の大関豊八等13戸は明治14年に大槻南原に、笠原豊吉等12戸は明治14年・15年・16年に安積郡塩ノ原に、春日土佐介は明治14年に対面原に、小平四郎等3戸は明治15年に安積郡駒屋北原に入殖した。

ほかに、鹿児島開墾人である白井矢七郎は明治13年に岩瀬郡吉美根原に、静岡開墾人である飯田定一は明治14年に牛庭原に入殖した。

明治15・16年頃までに西国からの入殖者は337戸、管内からは二本松藩・若松・棚倉藩等の困窮士族を救済するため104戸、他に鹿児島・静岡から2戸が入殖した。

### 当初の入殖予定者数

大久保利通は、入殖する戸数を2,000戸としていたが<sup>(6)</sup>、明治11年5月に大久保利通が暗殺されると、政策を引き継いだ伊藤博文や松方正義は、入殖戸数を大幅に減少させた。

明治13年8月12日に、福島県は松方正義内務卿に移住戸数を600戸で良いかどうかを伺い出ている。松方正義は、同年10月12日に平均300里（約1,200km）より600戸、1戸5人ずつの3,000人を移住させるよう指示している<sup>(7)</sup>。

入殖する藩と戸数は第3表のとおりである<sup>(8)</sup>。久留米士族が150戸・高知士族が120戸、鳥取士族80戸・松山士族40戸・岡山士族10戸の計400戸である。管内は180戸、予備20戸の合計600戸である。久留米・高知・鳥取・松山・岡山からの入殖者は約67%、管内は僅

第3表 入殖藩と戸数

藩名	戸数
	戸
久留米士族	150
高知士族	120
鳥取士族	80
松山士族	40
岡山士族	10
管内士族	180
予備	20
合計	600

か30%である。

西国からは、久留米・高知・鳥取・松山・岡山と入殖させる藩と戸数を記載しているのに対し、福島県では管内180戸とあるだけで、どの藩から何戸入殖させるか、具体的には記載していないのである。明治政府は、西国の久留米・高知・鳥取・松山・岡山の士族を優先的に入殖させようとしていたのである。

### 西国の入殖者不足を管内で補う

西国からの入殖者には、入殖を取り消す者・脱社・除戸・死亡等が続出した。

久留米士族は、入殖した者は141戸で9戸が取り消した。高知士族は、明治16年に110戸で打ち切ったが、さらに同18年に4戸が取り消し106戸となった。鳥取士族は、明治16年に67戸で打ち切ったが、同17年に美田豊・玉牧謙次郎の入殖が許可され69戸となった。松山士族は40戸が15戸に、岡山士族は10戸が4戸となり、入殖者は337戸で67戸が不足した。入殖者を600戸で進めてきたが集まらず、明治13年に100戸を減らし500戸とした。それでも入殖者が減ったのである。

西国や管内からの不足分を補うため、明治16年・17年・18年に管内や刈谷・高田藩などの士族を入殖させた。第2表の（ ）内の数字が補った人数である。

二本松開墾人を吉美根原に10戸、小田倉原に1戸。若松開墾人を塩ノ原に2戸、吉美根原に1戸、滑津原に1戸。棚倉開墾人を岡谷地原に1戸、滑津原に3戸、小田倉原に14戸。高田開墾人を滑津原に1戸、十軒原に1戸、八幡原に3戸。湯長谷開墾人を下原に1戸。川越開墾人を小田倉原に4戸。刈谷開墾人を小田倉原に1戸。静岡開墾人を小田倉原に1戸を入殖させた。

このように、久留米・鳥取・高知・松山・岡山士族の不足分を、若松藩・二本松藩・高田藩・湯長谷藩・棚倉藩・川越藩・刈谷藩・静岡藩の元士族を入殖させたのである。

### 入殖者は自由民権運動家

明治政府は、なぜ西国の士族を優先的に入殖させたのであろうか。それは、自由民権運動と大きく関係している。

自由民権運動は、明治7年に板垣退助・後藤象二郎・江藤新平・副島種臣等が民撰議院設立建白を政府に提出し、薩長藩閥の専制政治に反対する

近代民主主義運動である。当初は不平士族の運動であったが、次第に豪農や一般農民・都市民も加わり、国会開設、租税軽減、条約改正、地方自治権の確立を要求した<sup>(9)</sup>。

薩長藩閥政治を反発する士族は、明治7年に佐賀の乱、明治9年に萩の乱、明治10年に西南戦争を起こした。久留米士族の入殖はそのような時に行われた。

さらに、民撰議院設立建白書が、政府によって却下されると、板垣退助等は高知に立志社を結成したのをはじめ、各地に政治結社が組織された。福岡に堅志社・強忍社、鳥取に共立社等が結成された。高知士族や鳥取士族の入殖は、このような時期に行われたのである。

久留米藩は尊攘派の拠点の一つで、七生隊や応変隊を組織して明治政府と対立していた。そのようななか久留米藩難事件が起こった。久留米藩難事件とは、明治3年に山口において奇兵隊の反乱事件が起き、指導者の大楽源太郎が久留米藩内に逃れて来た。応変隊は源太郎を匿い逃走の手助けをしようとした。しかし、明治政府や山口藩の追求が厳しく、災いが久留米藩主に及ぶことを恐れ、翌4年3月に筑後川河畔において源太郎を殺害した。この事件が発覚し関係者が処分された。処分者に元応変隊隊長の森尾茂助や川口誠夫・太田茂・石橋六郎・吉富門蔵等がいる。森尾茂助・川口誠夫・太田茂は禁獄7年、石橋六郎は禁獄3年、吉富門蔵は禁獄1年を言い渡された。明治10年に西南戦争が起こると、森尾茂助等は政府軍に協力することを条件に釈放され、西南戦争後に赦免となった。大久保利通は国営の安積開墾に久留米藩難事件の関係者を勧誘した。利通の勧誘を受けた森尾茂助は、東京に来ていた中条政恒に会い、意を決し郷里久留米に帰り同志を募った。久留米士族141戸が久留米開墾社を結成して大蔵壇原と対面原に入殖した。入殖者のなかに久留米藩難事件で処分された森尾茂助・川口誠夫・井上達也・松村雄之進・太田茂・井上敬助・吉富安之助等がいる。元応変隊隊長であった森尾茂助は久留米開墾社の副社長、吉富安之助（門蔵）は監督係、松村雄之進は出納係を勤め、久留米開墾社の要職に就いているのである。他にも応変隊に参加していた人達が大蔵壇原や対面原に入殖したと見られる<sup>(10)</sup>。

高知は最も自由民権運動が盛んな所の一つで、立志社の他にも南獄社・南洋社・有信社・修立社・共行社・発陽社等がある。共行社は明治13年

10月に立志社から分派し、共行社の社長に水野寅次郎が就任した。その後、共行社は安積郡の開墾地に入殖する社員と、政府系の政党に接近する社員に分かれた。社員の桐島祥陽は政府系政党に接近し、社長の水野寅次郎は高知藩出身の政府高官佐々木高行と謀り、社員を安積郡の開墾地に入殖させた。水野寅次郎は入殖しなかったが、立志社から分離してわずか3カ月後の明治14年1月に大島義晴、同年3月に筒井秀勝が広谷原に入殖し、18年までに高知士族70戸が対面原に入殖した。入殖者のうち52戸が共行社の社員である。共行社の分離は、立志社の分断と勢力を削ぐことにあるのである<sup>(11)</sup>。

鳥取には、共応社・共斃社・愛護会・共立社の政治結社が組織されていた。鳥取士族は鳥取開墾社を結成して69戸が広谷原に入殖した。そのうち29戸が共立社に属していた。

明治13年11月10日に国会期成同盟第2回大会が東京で開かれた。2府22県の同盟各社の代表64名が13万余名の署名を携えて参加した<sup>(12)</sup>。今井鉄太郎は妻を伴い、仙石吉衛・坪内元暁と一緒に、東京で開かれた第2回大会に出席してから開墾地である広谷原に入殖した<sup>(13)</sup>。今井鉄太郎は鳥取開墾社の頭取、坪内元興（元暁の兄）は副頭取、仙石吉衛は幹事を勤めている。

このように、明治政府は久留米・鳥取・高知・松山・岡山士族を優先的に入殖させた。久留米・高知・鳥取に見るように、開墾に入殖したのは自由民権運動の活動家である。明治政府は、薩長藩閥の専制政治に反対する不平士族や、国会開設請願運動する政治結社の分断を謀り勢力を裂くため、遠く離れた開墾地に入殖させたのである。

#### 註

- (1) 福島県庁文書 F2705・F2012
- (2) 福島県庁文書 F2140・F2509、矢部洋三『安積開墾の展開過程』
- (3) 『福島県開墾志』（『郡山市史』9所収）
- (4) 矢部洋三『安積開墾政策史』
- (5) 福島県庁文書 F2705・F2012
- (6) 矢部洋三『安積開墾政策史』
- (7) 福島県庁文書 F2473
- (8) 福島県庁文書 F2509
- (9) 吉川弘文館『国史大辞典』7
- (10) 鈴木しづ子「安積開墾入殖士族の政治的背景」（『中条政恒 安積事業誌－翻刻と研究－』所収）
- (11) 矢部洋三『安積開墾の展開過程』
- (12) 福島県庁文書 F2706